

## 私たちがともにできることはもっとある

2007年1月、北米太平洋沿岸リーダーズワークショップにおけるティム・ジャキンズの話

私たちはみな、どうやって一人で生きていけばよいかについて考えながら大きくなりました。頭の中でそれを考えつづけ、だれかに助けを求めようとは思いませんでした。要するに、私の知るすべての人は頼れる指標を持たずに大きくなったのです。一人でものごとを判断して前に進まなければならなかったのです。私たちはいまだにどうすれば互いの資源を十二分に利用し合うことができるかわからないでいます。どうすれば信頼して互いに真に心を開き、自分が何に苦しんでいるかを見せ合うことができるかわからないでいます。みなさんは最高に良い人で、能力ある人です。様々なすばらしいことをやっています。けれども何ということか、頭の中がガラクタだらけです。(笑)だれもがそうです。それは傷のせいにはすぎません。それなのにどうでしょう！ これまでみなさんがしてきたことを考えてみてください。そうした状況でみなさんは最高によくやっています。

そう、みなさんにはまだだれにも話したことの無いガラクタがたくさんあります。毎日静かにつづいている混乱がたくさんあります。たとえば私はこの六、七年間、ある種の混乱について話してきました。自分を悪く思うことについてです。どうしても消すことができないように思える、こころの中のあのノイズです。それはすべての音の背後に聞こえる、サブウーファーからのゴロゴロという低音ノイズのようなもので、決して消し去ることができません。ガラクタの一つがそれです。

ガラクタのもう一つは、自分がどれほどひどく傷ついたかを人に言えないできたことです。多くのことと同様、このことから思い出されるのは子どもたちです。三歳と一歳の子について考えてみます。ある一歳の男の子はころぶと泣き出します。人を探し求めることもあります。とにかく泣き始めます。ある三歳の女の子はころぶとすぐに起き上がり、まわりを見てこう言います。「痛くないもん」その子は自分の経験した痛みを伝えることも、その痛みをわかってくれそうなだれかを探し求めることもできません。それどころか、傷ついた経験をしているさなかにすぐさま自分を守らなければならないのです。みなさんもそんな経験をした記憶がありませんか？

私たちはまわりの人々を遠ざけました。同じことをいまでもします。私たちは無意識のうちに自分の困難を互いに知られないようにするので、けっしてその困難に取り組むことはありません。私たちはひたすらそうした困難を耐え忍び、思いつく限りのベストのやり方で生きていきます。私たちは自分のこころがどれだけ傷に支配されつづけているかを見せようとしません。私たちはいまも自分を他人から守らなければならないと感じています。RCer とて例外ではありません。これは正しいことではないと思います。まったく正しいことではないと思います。私たちは何が本当に大変かを見せることができると思います。それによってだれかをひどく混乱させることはないと思います。二、三人混乱する人が出るかもしれません。しかし、ここには十分な資源が集まっているので、みんながいっせいに同じ混乱を起こすことはないでしょう。人々は理解し、そこにいつづけてくれるでしょう。そして私たちは自分を見せつづけることができるでしょう。

問題はそれを実行するかどうかです。それが可能かどうかテストすることはできるでしょうか？ まるで私が「耐えられない」ことをやれとみなさんに言っているかのようですね。私たちの多くはそうした傷をもっています。実際には耐えられないなんてことはないのですが、傷のレコードはそう言います。耐えられなさの簡単な定義は、ディスチャージできないほどの深い傷です。ディスチャージなしにそうした傷に直面し、もう一度それを感じ、経験することは耐えられませんかから、私たちはそれをしませんが。私たちは一人でそこには行きません。私たちはどうしたらだれかと一緒にそこに行けるかを考えつづけています。その答えがみつかることを蓄積した傷は待っています。この週末、私がみなさんの前に出したい課題の一つは、自分の傷を秘密にしておかなくても大丈夫かどうかをテストすることです。「痛くないもん」と言う必要も、一人で歩きつづける必要もないのです。

ある時点で私たちは、まわりにだれもいなかったときに諦めざるをえなかったものを取り戻す必要があ

ります。私たち RGer は、人と人のあいだにすばらしい関係性を築くことができるだろうと言いつづけてきました。そして、私たちはすばらしくよくやってきました。人々は私たちの関係性を称賛します。私たちが新しい場所でワークショップや会議を開くと、RGer 以外の人々がまわりを取り囲み、何かと理由をかこつけて会議室に入ってきます。私たちの互いの接し方が人を引きつけるのです。人々はそれが何であるかを知りません。ただ、私たちが一緒にいるときの様子が気に入ってるのです。私たちは互いによくやってきました。しかし、みんなの前でオープンにして取り組むことのできなかつた傷があることを知っています。私たちがともにできることはもっとあります。もっともってあります。そして、そのために小さかつたときの傷に取り組むのです。

Much More Is Possible Between Us

プレゼントタイム 2007 年 7 月号 29 ページより

Tim Jackins

翻訳 高坂明雄

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります（翻訳 2007 年。原文 2007 年）。

この翻訳はあくまで草稿として扱ってください。